

2020年1月30日

2019年度聖路加国際大学 大学院看護学研究科
課題研究

小児病棟における「院内外泊」に関する文献レビュー

Simulation-Based Preparation Prior to Discharge from Pediatric Ward:
A Literature Review

18MN006

沖田 亜希恵

要 旨

【目的】小児領域で退院支援として行われている『院内外泊』の実施目的、方法、および評価について現状と課題を知ることを目的とした文献レビューである。

【方法】医学中央雑誌 Web 版 (Ver.5) を用いて、「院内外泊」のみのキーワードと、対象を「小児」に限定し、小児看護で用いられている「付き添い」や「母子同室」を用語の対象とした。また、病院内に宿泊して体験することが重要なため、「泊」をキーワードとして追加し検索を行った。そしてハンドサーチで得られた文献を加え対象を 23 文献とした。抽出した内容から、継続的に医療的ケアが必要な子どもと家族に対して、退院支援プロセスとしてどのような支援が行われているかという点に焦点を当てその内容を整理、統合した。

【結果】『院内外泊』は一般化された用語ではなかったため、その用語については多様性があることが分かった。2000 年代より「院内」や『院内外泊』を用いた文献が増える傾向があった。目的として、看護師の目的と家族に対する目的に大別され、看護師は『院内外泊』を実施することで退院後の生活のリスクを少なくした療養生活につなげる目的があり、家族には、夜間を通して子どもの 1 日を把握し、在宅療養生活のイメージができ医療的ケアに自信をつけることが抽出された。目的として医療的ケアのある子どもの夜間の様子や状態、および 1 日の生活スケジュールを家族が体験することと、退院後に必要な医療機器の管理を外泊前に体験させていることが読み取れ、看護師は医療的ケアの手技習得と指導内容に不足がないかを確認し、家族には、子どもに必要なケアを実施し体験することと、医療機器の操作や医療機器のトラブルシューティングを目的としていることが読み取れた。評価として、看護師は、家族が『院内外泊』を実施することで、1 日を通して子どもの生活を知り、必要なケアを経験できたことを高評価していた。そして、子どもに必要な手技の習得度の確認や在宅移行に向けた家族の介護力を判断する機会として捉えていた。しかし、実施した家族の評価からは、医療的ケアのある子どもとの生活を体験し、ケアに自信を得られたことや、生活をイメージできたという一方で、『院内外泊』を実施することで不安を取り除くことや、一緒に生活をイメージすることが難しいことも抽出された。

【結論】先行研究では、在宅移行初期の家族は、生活を安定させるため模索しながらの生活を送っていると述べている。在宅移行支援で行われる『院内外泊』は、家族の暮らしのニーズに合わせて行うことで、家族の希望の暮らし方を知る機会となる。在宅医療機器を持って家族と暮らすことができるようになった子どもたちと家族を支え、俯瞰した視点から子どもと家族を捉え、家族の暮らしのニーズを聞き、ニーズに必要な社会資源や福祉サービスを考え情報の提供を行い、医療と家族の暮らしをつなぐ支援を行う必要があると考えた。

